

Title	中古日本語のトキ節に見られる文法的特徴
Author(s)	黒木, 邦彦
Citation	語文. 2007, 88, p. 45-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69090
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

中古日本語のトキ節に見られる文法的特徴

黒 木 邦 彦

一 はじめに

中古日本語（本稿では特に、一〇世紀から一二世紀前半にかけて、京都の貴族たちが話していたことばを指す。以下〈中古語〉）には、参照節との時間的關係を表す従属節がいくつもある（以下、従属節の事態を〈前件〉、参照節の事態を〈後件〉と呼ぶ）。その中で、形式名詞「とき」が承ける従属節（以下〈トキ節〉）は、前件と後件が同時関係にあること（以下〈前件∥後件〉）を表す。

(一) a この君の生まれたまひしときに、「前世の」契り深く思ひ知りにしが、「…」

b 身に瘡も一つ二つ出でたり。時もいと暑し。少し秋風吹き立ちなんとき、かならず会はむ。

c この君達の聞かましとき、もどかしと思はれまし

恥ずかしさよ。

（寢寛、卷一、六七）

トキ節の助動詞に目を向けると、(一)(二)のように、参照節と同じものが生起していることに気づく。ただし、トキ節と参照節で一致が見られる助動詞は、相互承接における承接順位が最も低い、「き」「けり」「む」「まし」などに限られるようである。これは一般に、テンスやムードなどとして範疇化される助動詞であるが、時間的に等価な節において、(一)のような現象が見られることを踏まえると、時間的な類似性を持つと考えられる。

本稿では、参照節との関係を視野に入れ、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を明らかにする。構成は次のとおりである。まず二節では、先行研究を概観し、トキ節に関するこれまでの議論を押さえる。続く三節では、先行研究の成果を踏まえつつ、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を明らかにする。考察にあたっては、現代日本語（本稿では特に標準語を指す。以下〈現代語〉）の事例を比較対象とし、それとの間に、どのような共通点・相違

点が見られるかにも触れる。最後の四節は結論である。

二 先行研究

トキ節についての論考は、現代語を対象とするものが圧倒的に多い。そこで、先行研究の概観は現代語からはじめ、その後、中古語に移る。

二・一 現代語のトキ節

本節では、現代語のトキ節に関する先行研究を概観する。二・一・一節では、トキ節の「た」の有無が、アスペクト的に機能することを確認する。二・一・二節では、トキ節が表す同時性の諸相を示す。二・一・三節では、「た」の有無がテンスとして機能する場合について述べる。

二・一・一 アスペクト的な機能を持つ「ゼロ」「た」

紙谷(一九七七)によれば、現代語のトキ節では、助動詞「た」の有無(以下、形態論的な標示を受けないものを「ゼロ」と呼び、標識の一つとして扱う)によって、〈将然〉〈過程〉〈已然〉〈完了〉という、四つのアスペクト的な意味が実現するといふ(次に挙げる例は、紙谷一九七七、七頁の例を私に改めたものである)。

(一) a 山を下りるとき、山頂で思わぬ人に会った。

〈将然〉

b 山を下りるとき、途中で思わぬ人に会った。

〈過程〉

c 山を少し下りたとき、雨が降りだした。

〈已然〉

d 山を下りたとき、はじめてその知らせを聞いた。

〈完了〉

紙谷における将然、過程、已然、完了は、限界性の面から、次のように言い換えることができる。

将然：開始限界未達成

過程：終了限界未達成

已然：開始限界達成

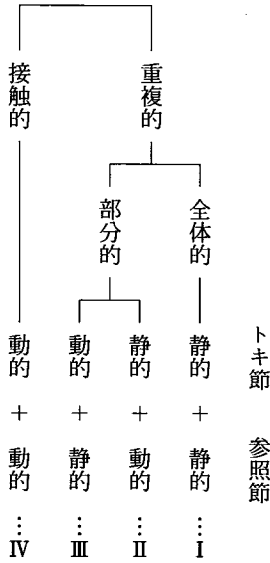
完了：終了限界達成

将然と過程、已然と完了は同じ標識によって表されるのであるから、前者は〈限界未達成〉、後者は〈限界達成〉としてまとめられる。紙谷によれば、「寝る」のような、開始限界の焦点化が困難な動詞(金田一九五〇の〈瞬間動詞〉、奥田一九七七や藤一九九五の〈主体変化動詞〉に相当)は、将然と已然のみを表すというが、そのような語彙的制限があるのなら、なおさら、「ゼロ」「た」のアスペクト的な意味を、四つに細分する必要はない。したがって、現代語のトキ節における「ゼロ」「た」の対立は、基本的に「限界未達成・達成」というアスペクト的な対立と考えることができる。

二・一・二 同時性の諸相

冒頭で述べたとおり、トキ節は「前件∥後件」を表す従属節である。工藤（一九九五、二四二頁以下）によれば、同時性には重複的なものと接触的なものがあり、前者はさらに、全体的か部分的かで分けられるという。この分類は、述語のアスペクト的な性格に基づいており、動的／静的（動態動詞述語で、なおかつ「ている」が標示されなければ動的、それ以外は静的）の組み合わせによって、図一のようなになる。

図一 同時性の諸相（工藤一九九五、二四二頁をもとに作成）



例文

I 熊本にいたとき、ファミレスでバイトしていた。

II 熊本にいたとき、飲みすぎて救急車で運ばれた。

III 熊本に行ったとき、国道道路はまだ工事中だった。

IV 熊本に行ったとき、財布をなくした。

接触的同時性は継起性と近い関係にあり、トキ節に「ゼロ」が標示されると「前件∥後件」を、「た」が標示されると「前件∪後件」を表すことになる（∩と∪は接触的同時性を表す記号であり、口の開いた方が先行）。工藤は、「重複的同時性の方はトキ（二）によってしか表せないが、接触的同時性∥接触的継起性であるとすれば、マエ（三）あるいはアト（デ）におきかえうる場合も出てくる」（一九九五、二四三頁）とし、次のような例を挙げている（表示形式は私に改めた）。

(二) a 受話器を取る（とき／前、一瞬祈るように目を閉じた）。

b 唇が離れた（とき／あと、女は少し怒ったような声を出した）。

前節では、トキ節における「ゼロ・た」の対立が、基本的に「限界未達成・達成」というアスペクト的な対立であると述べた。トキ節に現れる標識が、限界未達成を表す「ゼロ」であれば「前件∥後件」を、限界達成を表す「た」であれば「前件∪後件」を表すことから、工藤（一九九五）が指摘する「前件∪後件」と「前件∥後件」の違いは、「ゼロ・た」の対立に基づくことがわかる。

二・一・三 テンスとして機能する「ゼロ」「た」

二・一・一節では、トキ節における「ゼロ」「た」の対立が、基本的に「限界未達成・達成」というアスペクト的な対立になると述べた。そして、二・一・二節では、トキ節が表す同時に下位分類がいくつかあり、そのうち、「前件〇後件」と「前件〇後件」の違いが、「ゼロ」「た」の対立に基づくことを確認した。

ただし、「基本的に…」という但し書きからわかるように、トキ節における「ゼロ」「た」の対立は、常にアスペクト的な対立となるわけではない。高橋（一九七四）によれば、連体節における「ゼロ」「た」の対立は、「非過去・過去」というテンス（絶対的テンス）対立になることがあるという。これはトキ節にもあてはまることで、たとえば、次のような例が挙げられる。

(四) a 今度学校に来るとき、研究室で先生と会う予定だ。

b 学校に来たとき、電車の中で友達に会った。

(五) a 今日ご飯を食べるとき、僕が食器を洗うよ。

b ご飯を食べたとき、まず手をきれいに洗った。

三原（一九九二）によれば、連体節の「ゼロ」「た」がテンスとして機能するのは、参照節に同じ標識が生起する場合に限られる

という。こうした制限の存在から、現代語のトキ節では、テンスの標識が必ずしも義務的ではないことがわかる。このことは、次の例からも知られる。

(六) a 風邪で寝込んでいる／寝込んでいたとき、彼女がお見舞いに来てくれた。

b 受験を控えて、精神的に（つらい）／（つらかった）とき、彼女が励ましてくれた。

二・二 中古語のトキ節

二・一節で見たとおり、現代語のトキ節では、テンスの標識が必ずしも義務的ではなく、「ている」はもちろんのこと、「ゼロ」「た」も基本的にアスペクト的な意味を表す。トキ節における「ゼロ」「た」の対立は、接触の同時性の違いに直結しているのであるが、中古語のトキ節においても、これと同様の現象が見られるか否かが注目される。

井島（一九九二）の調査によれば、上代・中古語のトキ節には、いわゆる〈完了の助動詞〉の「つ」「ぬ」「たり」「り」も、〈過去の助動詞〉の「き」「けり」も問題なく生起するという（「ゼロ」の例ももちろんある）。井島はこのデータをもとに、上代・中古語のトキ節について考察しているが、参照節の標識を觀察していないため、トキ節に生起した標識が、どのような意味・機能を持つかの検証が困難である。

現在のところ、文法的な面から中古語のトキ節について論じた

ものは、井島(一九九二)以外にないようである。次節では、先行研究の成果を踏まえつつ、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を明らかにする。考察にあたっては、現代語の事例を比較対象とし、それとの間に、どのような共通点・相違点が見られるのかも触れる。

三 中古語のトキ節に見られる文法的特徴

本節では、中古語のトキ節に見られる文法的特徴を概観する。

三・一節では、トキ節と参照節に現れるテンス／ムードの標識が一致することを確認し(三・一・一節)、その現象に対して説明を試みる(三・一・二節)。三・二節では、中古語のトキ節が表す同時性の諸相を観察し、現代語との違いを指摘する。

三・一 テンス／ムードの一致

三・一・一 現象の確認

中古語のトキ節に見られる文法的特徴として、第一に挙げられるものは、一節で見た、参照節との標識の一致である。

(七) a この君の生まれたまひしときに、「前世の」契り深く思ひ知りにしか「…」

b 身に瘡も一つ二つ出でたり。時もいと暑し。少し秋風吹き立ちなるとき、かならず会はむ。

(源氏、若菜上、「四」一二八、(一a)再掲)
(伊勢、九六段、二二六、(一b)再掲)

c この君達の聞かましとき、もどかしと思はれまし恥ずかしさよ。(寢寛、巻一、六七、(一c)再掲)
d 声ふりたてて遊ぶときに、大空に音声乗して、紫の雲に乗れる天人、七人連れて下りたまふ。

(うつほ、俊蔭、「二」二九)

(一)には挙げなかったが、分布を見る限り、(七d)に挙げた「ゼロ」もこの現象に関係するようである。結局、参照節との標識の一致に関わるものは、承接順位が最も低い「き」「けり」「む」「じ」「らむ」「けむ」「まし」に、無標の「ゼロ」を加えた合計八つということになる(以下、この八つの標識を「テンス／ムード」、参照節との標識の一致を「テンス／ムードの一致」と呼ぶ)。

なお、テンス／ムードの一致にあたる例は、(七)のような、トキ節と参照節に同一の標識が生起するものに限らない。テンス／ムードは時間的な意味によって、

非過去…「ゼロ」「む」「じ」「らむ」

過去…「き」「けり」「けむ」

反事実…「まし」

のように分類されるが、この分類において同類とされるもの同士であれば、テンス／ムードが一致しているものと見なす。たとえば次のようである。

(八) a 家といふものは、券持たる人より外に領る人なきと聞きしかば、おだし思ひて、あるは、我が家

とも名乗らでありつるは。「中納言が」かうした
まふ「二三条邸に引越しようとする」ときこそ、
「かかることどもありけり」とも言はぬ。

(落窪、卷三、二八三)

一 かかることどもありけり…さういえば、三条邸
の地券は、これこれの事情で自分の手元にあるの
だった。

b

北の方、琴遊ばすこと、昔大将の大臣に対面した
まひし山に住みたまひしとき、弾きたまひけるま
まに「…」（うつほ、尚侍、「二二三五〇）

三・一・二 現象に対する説明

かつてのことではあるが、前節で述べた定義に基づき、テンス
／ムードの一致がどの程度見られるか調査したところ、四〇〇例
を越えるデータのうち、九割以上でこの現象が確認された。この
結果は、井島（一九九二）の仮説を検証するための材料となる。
井島は、「トキ副詞節は現代語においては主節に対して従属節
「従属性の誤り―黒木注」が高いと言えるが、上代・中古語にお
いては主節「本稿の参照節に相当―黒木注」に対して独立性が高
く、場合によってはほとんど等位に立っている」という考えに立
ち、古典語のトキ節と現代語のトキ節の従属性（統語構造ではな
い点に注意）の違いを、次のように表現している（表示形式は私
に改めた）。

(九) a 古典語 「副詞節」とき―「主節」

b 現代語 「副詞節」とき 主節

二・二節で述べたとおり、トキ節のみの調査による、井島の説は、
あくまで仮説に過ぎない。参照節との関係に目を向けることでは
じめて、その真偽が明らかになるのである。

四〇〇例を越えるデータの九割以上で、テンス／ムードの一致
が見られるという結果から、井島の仮説は正当と見てよい。中古
語におけるトキ節の従属性は（九 a）のようであるから、それぞ
れの節にテンス／ムードを標示する必要がある。このとき、二つ
の節に現れる標識が時間的に類似するのは、トキ節が「前件Ⅱ後
件」を表す従属節だからである。

三・二 接触的同時性

二・一・二節では、現代語のトキ節が表す同時性に下位分類が
いくつかあり、そのうち、「前件Ⅰ後件」と「前件Ⅱ後件」の違
いが、「ゼロ―一た」の対立に基づくことを確認した。

ところが、中古語のトキ節においては、「前件Ⅰ後件」と「前
件Ⅱ後件」の違いを標示する方法がないようである。

(一〇) a 「今、この琴いとよく習はせたまひてん」ときに、

渡りたまひて、もろともに御覽せむ」とぞのた
まひし。（うつほ、楼の上下、「三二五一一五）

b この帯、右の大臣の内裏へ参りたまへらんととき、
藏人所に持て行きて、「売る物なり」とて出だ

(二一) (うつつは、忠こそ、「二二三四」せ。

(二二) a 「私内大臣が」源氏の入道の一家に侍りしほど、出家しはべりしとき、「二二」と、泣く泣く遺言せられしに「二二」(寢覚、巻四、二九二)

b 「北の方が絹五〇匹を」取らせたまふときに、「博打」「いと易きことにはべり」とて去ぬ。

(二三) (うつつは、忠こそ、「二二三四」) a 声ふりたてて遊ぶときに、大空に音声樂して、紫の雲に乗れる天人、七人連れて下りたまふ。

b (うつつは、俊蔭、「二二二九、(七d)再掲) 久しくこのわたりに見えたまはず。ここには、月の宴したまひしときに、消息言はせたまへりし。

(二四) (うつつは、蔵開上、「二四四一〇」)

(二〇) のように、「一」「一ぬ」「一たり」「一り」といった、形態論的に有標のアスペクト標識が標示されると、必ず「前件」後件」を表すが、「ゼロ」の場合は複雑である。限界動詞の場合、(二一 a) のように限界未達成を表すこともあるが、大抵は(二一 b) のように限界達成を表す。非限界動詞の場合、(二二) のように、必ず限界未達成を表すようである。

そこで、トキ節の述語を、a) 動詞分類(限界動詞/非限界動詞)、b) アスペクト標識、c) テンス標識の三点に基づいて分類し、そのアスペクト的な意味が、限界未達成と限界達成のどちらになるかを調査した。その結果を表一に示す。

表一 トキ節のアスペクト的な意味

動詞分類・ 限界性	アスペクト標識・ テンス標識		限界動詞		非限界動詞	
	ゼロ	一	限界未達成	限界達成	限界未達成	限界達成
合計	40	0	12	26	0	12
ゼロ	1	0	0	0	0	0
一	14	0	7	6	0	7
二	3	0	0	3	0	0
三	18	0	0	17	1	0
四	1	0	0	1	0	0
合計	76	0	19	53	4	0

本節の冒頭で述べたことは、表一から確認できる。中古語のトキ節においては、「前件」後件」と「前件」後件」の違いを標示する方法がないのである。

四 結論

本稿では次の二点を明らかにした。

(二五) a 中古語においては、ほとんどの場合、トキ節と参照節のテンス/ムードが一致する。よって、井島の仮説どおり、中古語のトキ節は従属度が低い(独立度が高い)と見てよい。

b 中古語のトキ節には、「前件」後件」と「前件」後件」の違いを標示する方法がない。有標のアスペクト形式が標示されると、必ず「前件」後件」を表すが、「ゼロ」の場合は複雑である。

(二三) が他の従属節にも通用するかにについては、今後追及していく必要がある。ただ、トキ節以外でも、時間的に等価であればテンス／ムードの一致が見られるようなので、(二三a) の指摘は、中古語の統語論に対する貢献が期待できる。

注

(1) 時間的な面で従属節を参照する節。終止法の述語をとる主節とは、必ずしも一致しない。

(イ) 北の方、琴遊ばすこと、「昔大将の大臣に對面したまひし山に住みたまひし」とき、弾きたまひける」ままた、その後さらに住みたまひける世に、手触れたまはず。

(う) うつほ、尚侍、「二二二五〇」(イ) における主節は「手触れたまはず」であるが、トキ節が時間的に参照している節は「弾きたまひける」であるから、これが参照節となる。

(2) 言語学研究会・構文論グループ(一九八九)における〈未完結〉と〈完結〉の区別はこれに近い。ただし、彼女は、紙谷が言うところの既然にあたる、〈継続〉という意味を立てており、この点で本稿とは異なる。

(3) 調査文献は次のとおり。『伊勢物語』『落窪物語』『うつほ物語』『源氏物語』のテキストは、言語資料に挙げたものと同じ。他は全て『日本古典文学大系』(岩波書店)。

『竹取物語』『伊勢物語』『土左日記』『平中物語』『落窪物語』『かげろふ日記』『うつほ物語』『大和物語』『枕草子』『源氏物語』『紫式部日記』『栄花物語』『和泉式部日記』『浜松中納言物語』『夜の寝覚』『更級日記』『狭衣物語』『大鏡』『篁物

語

(4) 形式名詞「のち」が承ける従属節(以下(ノチ節))について言えば、ノチ節に「き」「けり」、参照節に「ゼロ」が標示されるという例が多数ある(黒木二〇〇七参照)。これは、ノチ節が、前件と後件の継起関係を表す従属節のためだろう。

言語資料

伊勢物語(一〇世紀前中?) : 『日本古典文学全集』八、小学館、一九七二、福井貞助(校訂)、底本||伝定家筆本

落窪物語(一〇世紀後) : 『日本古典文学全集』一〇、小学館、一九七二、三谷栄一(校訂)、底本||実践女子大学図書館蔵本(旧安田文庫蔵本)

うつほ物語(一〇世紀後) : 『新編日本古典文学全集』一四一六、小学館、一九九九、二〇〇二、中野幸一(校訂)、底本||前田家本

源氏物語(一一世紀初) : 『新編日本古典文学全集』二〇(二五、小学館、一九九四、九八、阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男(校訂)、底本||伝明融筆臨模本・大島本・伝定家筆本

引用文献

井島正博(一九九二)『古典語におけるトキ副詞節』、『国語学会一九九二年度春季大会予稿集(於筑波大学)』、国語学会
奥田靖雄(一九七七)『アスペクトの研究をめぐって—金田一段階—』、『国語国文』八、宮城教育大学「再録」:『ことばの研究・序説』、八五—一〇四頁、一九八四
紙谷栄治(一九七七)『助動詞「た」の一解釈—形式名詞「とき」につづく場合を中心に—』、『京都府立大学学術報告 人文』二九、一—一〇頁、京都府立大学

- 金田一春彦(一九五〇)「国語動詞の一分類」、『言語研究』一五、日本言語学会「再録：金田一春彦(編)『日本語動詞のアスペクト』」五、二六頁、むぎ書房、一九七六
- 工藤真由美(一九九五)『アスペクト・テンス体系とテクスト―現代日本語の時間の表現―』、ひつじ書房
- 黒木邦彦(二〇〇七)「中古日本語におけるアスペクトとテンスの相関―主節とノチ節の考察から―」、『国文研究』五二、八五―一〇二頁(左開き)、熊本県立大学
- 言語学研究会・構文論グループ(一九八九)「接続詞「とき」によってむすばれる、時間的なつきそい・あわせ文」、『言語学研究会(編)』『ことばの科学』三、一一九―三四頁、むぎ書房
- 高橋太郎(一九七四)「連体形のもつ統語論的な機能と形態論的な性格の関係」、『教育国語』三九、むぎ書房「再録：松本泰文(編)『日本語研究の方法』」一三三―一五八頁、むぎ書房、一九七八
- 三原健一(一九九二)『時制解釈と統語現象』、くろしお出版

―本学大学院博士後期課程―